

京都大学	博士（文学）	氏名	蒲 豊彦
論文題目	闘う村落：近代中国華南の民衆と国家		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>序章</p> <p>本論文は、中国広東省の東部沿海地域、すなわち潮州、汕頭から海豊、陸豊両県に至る地域を主な対象として、明の中期（16世紀前後）から、広東東部において農民運動が終息する1920年代末までの歴史を、基層社会に焦点をあてて描くものである。この時期をとおして、宗族の存在と、明末清初以来の械闘の盛行が、同地域を特色付けていた。</p> <p>宗族や村落が互いに武装闘争を繰り広げる械闘は、単なる暴力ではなく、中世の西洋や日本に見られたような自力救済的な慣習だった。宗族および械闘がどのように成立し、そののちどのような経緯をたどったのかが本論文の第一の課題である。他方で、日清戦争（1894～1895年）前後から各種の民間組織が活性化しはじめ、青年が台頭し、社会改良への志向が顕著となっていく。日清戦争以降のこの新たな動向を追跡しつつ、とりわけ海陸豊ソヴィエト政権期に、その動向が、宗族および械闘に象徴される地域の原構造とどのように関わったのかが本論文の第二の課題である。</p> <p>研究手法上の特色として、本論文では、欧米の各種ミッション、とりわけイギリス長老教会が残した大量の報告書や書簡を利用している。地域史研究への宣教師文書の本格的活用は欧米では始まっているものの、中国では見られず、日本でもごく一部の研究者のあいだで始まったばかりである。</p> <p>第I部 華南農村社会の基本構造</p> <p>第1章 村落と械闘</p> <p>広東東部では、明の嘉靖年間（16世紀）ごろから有力な士大夫層の出現とともに宗族が成長しはじめるが、この時期は、山賊や海賊、倭寇の活動もピークを迎えていた。そのなかで宗族の成長とあいまって多くの村落が武装堡壘化していく。やがて清朝が成立して地域の秩序が回復するものの、村落（宗族）間の戦いが習慣化し、械闘になっていった。械闘は復讐の観念や殺人とも深く結びついていたが、それだけではなく地域が強大村（大族）と弱小村（小族）に分化しつつ、連合体を形成して戦うようになった。こうして地域間の対立関係が固定化すると同時に、村落（宗族）はより強大な力を備えて、官吏にも抵抗しはじめる。</p> <p>第2章 西洋の到来</p> <p>19世紀のなかごろから、広東東部へも西洋人が本格的に進出するようになる。この時期、天地会の反乱に際して官側が団練政策を取ったことを一つの契機として、とりわけ沿海部の村落がさらに自立性を高め、地域がある種の無法状態に陥っていた。それはイ</p>			

ギリス商人の活動をも妨げるものであったため、イギリス領事と中国側官吏が共同で海賊村の討伐にあたる。その延長線上で行われたのが潮州鎮総兵・方耀による強圧的な地域弾圧であり、これによって治安が回復した。一方、イギリス長老教会は在来のマーケット・システムに乗るような形で布教を進めていたが、地域の住民は、近隣とのもめ事や訴訟に際して援助を得ようとして宣教師に近づく。ミッションが欧米列強の力を背景としてしばしば裁判に干渉したからであった。つまり、イギリス領事と宣教師のいずれも、地域の官対民、民対民の敵対的構造に巻き込まれたのであった。

第Ⅱ部 変革期

第3章 日清戦争と教会—高まる不安

1870年代に行われた方耀による地域弾圧の際には、そこから身を守ろうとしてキリスト教への入信者が急増した。そして第2回目の信者急増が日清戦争期から辛亥革命期にかけて起こる。このときの急増の要因は、隣人や官から身を守るためではなく、王朝が崩壊するのではないかという不安にあり、そのような不安感が、広東東部のみならず中国を広く覆っていた。こうして、日清戦争ののち、排外感情が激化して教会や信者を攻撃するいわゆる教案が多発すると同時に、教会が急成長しはじめる。

第4章 義和団事件から辛亥革命へ—活性化する結社

日清戦争から辛亥革命にかけての広東東部は、他方で、コレラやペストなどの悪疫に繰り返し襲われ、そこに干ばつや不作などが重なった。そのなかで住民の一部は大峰会という結社を組織してペスト対策に従事した。ところが同組織は、何万人にもふくれあがった段階で、かねて地域住民と軋轢のあったキリスト教会に矛先を向ける。これが広東東部の義和団事件である。同様の民間組織は、福建の齋会、山東の大刀会、東北の在理教等々、各地で確認できる。日清戦争やペストなど、個々の村落では対処できない課題のなかで、人々は教会に保護を求める一方で、自衛、互助的な組織活動を活発化させたのであった。そして、清末に成長したもうひとつの結社・三点会を核とする民軍が主力となって、広東東部の辛亥革命が達成される。

第5章 青年と改革の時代

しかし辛亥革命後に治安の障害となった民軍は肅清され、大峰会もいつの間にか消滅して善堂に姿を変えた。こうした旧来の秘密結社型の組織と入れ替わるかのように、清末から1910年代にかけて、陳炯明とその盟友たちのグループ、YMCA、五四運動期の青年などが新たに登場する。その組織は、青年が主体となっていた点に大きな特色があり、それは、清末以来の青年の台頭という中国全体の動きと明確にリンクするものであった。かれらは、やはり村落や宗族には依拠しない新しい組織を作り、各種の社会改良事業を進めた。この流れのなかで次に出現するのが、1920年代の農民運動である。海豊県を発祥地とする農民運動は、最初は互助的な組織として始まり社会改良にも着手したが、まもなく、農会員の多さに依拠して正面から減租を要求する方向に向かう。

第Ⅲ部 武装闘争のゆくえ

第6章 国共合作から東征へ

地主と衝突した海豊の農民協会は、県政府によって1923年に一旦解散させられるものの、1924年1月に国共合作が成立すると農民協会が公認されて広州の周辺で発展しはじめる。ただし合作下の広東軍政府は、治安維持に役立てるため同時に民団をも育成しようとした。しかし、まもなく農民協会が農民自衛軍を備えると、民団とのあいだで頻繁に衝突を繰り返すようになる。こうした状況下で、1925年から1926年にかけて陳炯明にたいする東征が行われ、海陸豊の農民協会もこのとき復活する。ところがこのとき、武力で戦うという広州周辺の闘争方法が海陸豊へも持ち込まれ、海陸豊の農民協会はそれまでの社会改良的事業から、地主にたいする武力闘争へと明確に方針を変え、さらに、末端の農会員たちは上層部の統制をはずれて勝手に振る舞い、復讐や殺人にさえ走るようになった。武力による自力救済が、形を変えて再登場したともいえよう。

第7章 海陸豊ソヴィエト政権

武力闘争に転じた広東東部の農民運動は、1927年の四・一二クーデターを機にさらに急進化する。その主な要因は、農民がすでに指導部のコントロールを逸脱しはじめていたことに加え、中国共産党が地主階級にたいする抹殺政策をとったことにある。その行き着く先が、集会と処刑とが一体化した「人頭大会」である。ただし、この一連の過程で、いわゆる反動派も宗族連合や秘密結社を動員して抵抗し、共産党側との戦闘は、階級闘争なのかそれともかつての械闘なのか判然としないものに陥る。こうして、海陸豊全域が戦場の様相を呈し地域が荒廃しつつあるなかで、1928年2月末3月初に至って、ついに外部からの国民党軍の攻撃によって海陸豊のソヴィエト政権が崩壊した。

終章

明の中期もしくは明末清初以来、広東東部の人々は、宗族という組織と、それに依拠して戦うという習慣を保持してきた。社会のそのような基礎構造の上部で、日清戦争のころから、宗族や村落を超えて社会活動を行おうとする組織が活性化し、やがてそれが1920年代の農民協会へと行き着く。そして1924年の国共合作以降、国共の両党は新しい国作り、すなわち救国や革命への参加を地域の住民にも求め、民団や農民協会（農民自衛軍）を援助、育成しはじめる。つづいて1925、26年の東征によって海陸豊の農民運動は武装闘争の段階に入る。さらに1927年の国共分裂によって、共産党はより広範に農民を動員する必要に迫られ、地主、反動派の抹殺政策をとる。これは武装闘争の極致と言ってもよい。しかし、農民運動が始まったのは1922年であり、極めて短期間のうちにあまりに急速に情勢が変化し、共産主義活動家と農民のいずれも、経験を積む時間がなかった。こうして農民たちは、おそらく結局は清朝以来の行動パターンに従わざるをえず、共産主義革命家もそれを追認し増幅させ、かつての械闘的世界を大規模に現出させたかのような暴力の連鎖のなかで、ソヴィエト政権が消滅したのであった。ただし、新

しい国作りに庶民が参加を要請されたことの意味は小さくなかった。そののちの中国革命の成否は、まさに人民をどのように動員するかに掛かっていたからである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、1927年に中国広東省の海豊・陸豊（以下、海陸豊）で成立したソヴィエト政権下（1927年11月-1928年3月）でなぜ凄惨な暴力闘争が起こったのかを明らかにした論考である。1920年代、中国各地で農民運動が活発化するが、海陸豊は農民運動が最も過激化した地域の一つとして注目されてきた。論者は、その原因を華南農村社会の基本構造に求め、明中期から1920年代末にいたる約400年間の地域の歴史を再構成した。

その際、論者が着目したのは、械闘と呼ばれる村落・宗族間の武力闘争である。広東東部は華南でもとりわけ械闘が盛んな地域だった。械闘はこれまで農村の宗族制度の「愚かさと後進性」を示す陋習と見なされ、そのメカニズムが探究されてこなかった。論者は、明中期以降のさまざまな事象、すなわち宗族の形成、倭寇、村落の城塞化・武装化、遷界〔17世紀後半、沿海部の住民を内地へ強制移住させた政策〕、村落連合の形成、天地会の反乱、抗糧などが密接に絡み合う中で、城塞化した村落同士が武力抗争を繰り返す華南農村が出現したことを明らかにした。論者のいう「闘う村落」である。

農民運動の実態に迫るためには、農民の精神構造や行動様式を理解する必要があるが、中国史では基層社会の実情を伝える史料が決定的に不足している。そこで論者が着目したのが、キリスト教宣教師の書き残した史料群（宣教師文書）である。宣教師文書はこれまで中国キリスト教史以外の分野では積極的に使われてこなかった。本論文は宣教師文書を地域史解明の重要史料とし、漢文史料からは見えてこなかった基層社会の実態を、生き生きとした筆致で描いた。「宣教師文書が中国研究にどの程度有益なのかを示す個別研究である」という論者自身の位置づけが、本論文の意義をよく物語っている。

キリスト教は、19世紀の社会不安の増大を背景に、華南農村に勢力を伸ばす。宣教師が訴訟に介入することで信者を獲得し、キリスト教徒とそれに反発する人々の間に緊張が高まったことはよく知られるが、論者はこの対立が宗族や村落同士の間に存在する敵対構造のなかで展開されたことを示した。宣教師はこうした構造に巻き込まれ、時にそれを利用しながら、この構造のなかに組み込まれていった。国家権力が社会の末端に及ばず、民衆に自力救済を求める中国社会で、キリスト教は、大峰会や三点会のような秘密結社と同じ役割を果たすことになる。

キリスト教や結社の活動が従来の社会構造のなかで展開したのに対して、辛亥革命期の陳炯明らによる革命運動、YMCAの社会改良運動、五四運動期の彭湃らによる農民運動は、既存の構造を越えて展開していくことになる。論者はこの変化を「村の長老と秘密結社の時代から新青年を中心とする新たな組織の時代へ」と表現する。旧来の村落政治で長老に従い政治的発言権を持たなかった青年層が、社会変革の主体となり、農民を巻き込むなかで、彼らの伝統的な行動様式と共鳴し、衝突する。

1920年代半ば、広東省の農村では、農民協会と地主の間で激しい武力闘争が繰り返される。共産党史の観点からは、「革命」と「反革命」の闘争と位置づけられるが、農民が欲したのは「復讐」であり、革命ではなかった。そして、この農民の復讐心の基礎にあったのが「械闘的原構造」であった。農民にプロレタリアートとして政治的主体性を

求めれば求めるほど、彼らの伝統的な思考や行動があらわにならざるをえないのである。共産党史観が示すところとは違って、農民運動はつねに正しいとは限らない。海陸豊のそれは「ゆきすぎ」ではなく、同じような光景は何度も繰り返されてきたのであり、その根底にあったのが「闘う村落」であった。論者の主張は明確である。

本論文は長いタイムスパンで華南農村社会の連続性（構造）と非連続性（変化）をとらえ、きわめて多種の史料を縦横に駆使することによって、オーソドックスな中国史研究ではアプローチが困難な農民の精神構造や行動様式を明快に描き出した。本論文が、今後の地域史研究の一つのモデルとなることは間違いなく、中国共産党史や中国キリスト教史の研究も、今後は本論文を参照することなしには、一步も前に進むことはできないであろう。本書に盛りこまれた膨大な事実と実相の事例提示は、それ自体が新たな領域開拓と呼んでよいものであり、中共党史における革命史観の陳腐さを、また中国キリスト教史における福音主義の虚構性を、これ以上ないほど明瞭に暴き出している。

現在中国では海陸豊の農民運動は研究上の「禁区」になっているという。その運動が革命という言葉ではくくれない凄惨な大量殺戮を伴ったからである。それゆえ、それを共産党の暴力的支配の体質と断罪する研究も中国以外では見られるが、本論文はそうした一方的指弾には与せず、運動の「残虐性」を「ひとまず農民たちが持てる力を振り絞って戦ったことを示すもの」と捉える懐の深さを持つ。「械闘的原構造」の存在が持った基底（規定）性を知る者だけが持ちうるこの度量の大きさと視野の広さは、本論文をきわめてユニークにして極めて完成度の高い革命運動史研究にしている。現時点では難しいかもしれないが、本論文が中国語に翻訳され、出版されることを切に願う。それが実現する時、本書の長き探究の歩みは、初めて完結することだろう。

一方で、さらに踏み込んでほしかった点もある。その一つがジェンダーである。キリスト教会にも女性信者は少なからずおり、武力闘争に注目した本論文でも女性の姿が散見する。長老を頂点とする宗族の敵対構造のなかで、女性たちはどのような役割を期待され、また果たしたのだろうか。また、YMCAは青年主体の組織論を提供し、長老の時代から青年の時代への転換において重要な役割を果たしたと評価されるが、当該地域においてYMCAが具体的にどのような役割を果たしたのかが明確ではない。さらに、当該地域で盛んになった海外移民が農村の社会構造にどのような影響を及ぼしたのか、華南の農民運動が中国全体の農民運動のなかでどう位置づけられるのか、ソヴィエト政権崩壊後に「闘う村落」はどうか、といったことも気になる。今後の研究で、こうした問題にも取り組み、本論文をいっそう精緻なものとしてもらいたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2021年9月3日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。